



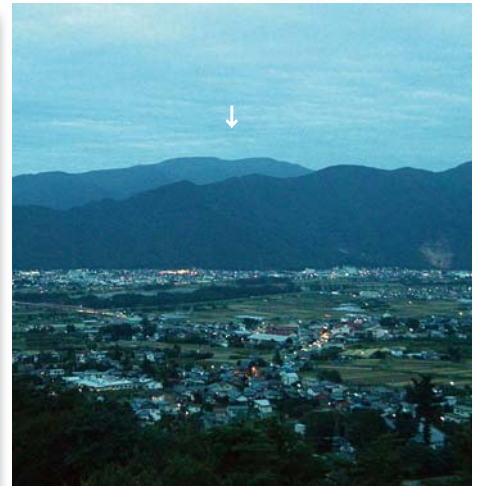
第29号

さらしなの里

友の会だより



2013・秋



さらしなの里展望館から鏡台山方面



「荒城の月」などを披露するベル・チャイム今井のみなさん

さらしなの「後の月」を堪能

さらしなの里の郷嶺山（千曲市羽尾5区）。山頂からは里の姿をはじめ千曲川の流れ、さらしな・姨捨の名月の舞台、鏡台山が見渡せます。10月19日、この山で月を写真に収めようと思いました。この日も十五夜で満月。ひと月前の中秋とはまたひと味違い、秋の気配が深まり一段と美しい「後の月」と呼ばれる夜です。

撮影場所は、そばも食せる「さらしなの里展望館」2階のベランダ。国立天文台によると、鏡台山付近からの月の出は午後5時45分ごろ。この日は明け方に降った雨雲が空に居座りましたが、夕刻には上空の雲のすき間にわずかに空が見えるようになりました。月の出は断念し、雲間の月を狙うことになりました。なかなか現れません。辺りは真つ暗闇。しかし、あきらめられませんでした。更級村初代村長の塚田小右衛門さんが122年前の明治24年（1891）、この場で挙行了した一大観月会のことから頭にあつたからです。

塚田小右衛門さんは「汽笛一声新橋を…」で知られる鉄道唱歌の作詞者、大和田建樹さんを東京から当地に招き、郷嶺山での観月のすばらしさを世の中に広めようとした。大和田さんは「今よりは人にほこらんにしへの月の都の月をみつれば」という和歌を詠みました。さらしなの里を「月の都」と呼び、そのの月を味わえたことが大変な自慢になると言っているのです。大和田さんの感激を味わいたいと思えました。

寒さに震えているうちに雲間から月の光が漏れ始め、午後6時10分すぎ、お月さんが姿を見せました（写真上）。月光を浴びた周囲の雲の表情も味わい深く、すこみを感じます。展望館2階ではこの夜、文化グループ、更級人「風月の会」のお月見会も開催。月が現れたのは、「ベル・チャイム今井」のみなさんの演奏が終わった直後でした。美しい音色に浸ったあとの満月。参加者からは「一枚を母にはおらせ後の月」（千曲市屋代在住の青木久美子さん作）という「後の月」をテーマにした句も披露されました。さらしなの「後の月」を堪能しました。

（芝原区・大谷善邦）

火おこし合戦

千曲市合併10周年記念プログラム

おいんなして!
 第21回さらしなの里
 じょうもん
縄文まつり
 10月27日(日)
 入場無料
 小南沢行
 さらしなの里古代体験パーク

■主催:さらしなの里縄文まつり実行委員会
 ■共催:さらしなの里歴史資料館
 ■協賛:千曲市立栗岡小学校
 ■後援:千曲市 千曲市教育委員会

お問い合わせ
 さらしなの里縄文まつり実行委員会事務局
 千曲市さらしなの里歴史資料館
 〒369-0412 長野県千曲市大字羽尾 247-1
 TEL: 026-276-7511 FAX: 026-261-4161

千曲市が合併して10年がたち、さらしなの里縄文まつりも21回目(10月27日開催)を迎えました。今回の縄文まつりでは、10周年記念事業として、縄文村特製の火おこし器を使って親子で火をおこしてもらおう「火おこし合戦」を企画しました。

新たな時代に向かって、市民の一体感の醸成と連帯感を図り、夢と希望あふれる千曲市を市内外にアピールするのが狙いです。

火おこしは人間が生きていくうえで最も重要な技の一つ。縄文まつりでも、まつりの始まりに子どもたちが取り組み、縄文住居に提供、焼肉用の火として

も使ってきました。伝統文化の継承をしつつ、新たな取り組みとして合併10周年の機会を活用できたらとの思いで企画しました。

縄文まつりがマンネリ化しないように、また20回の縄文まつりで、神事に使うソヨゴを記念植樹したように、21回の縄文まつりは火起こし合戦をやったねと、記憶に残る縄文まつりにしたいとの思いがありました。

「22回の縄文まつりは何をやるのか」という発想を継承していけば、より縄文まつりが盛り上がるのではないのでしょうか。(さらしなの里歴史資料館前職員・柴田洋一)

さらしなの里展望館、リニューアルオープン!



さらしなの里展望館が7月3日(大安)に、リニューアルオープンしました。店主は羽尾5区の森和博さん。そば職人は、磯部の深澤一吉さん。森さんはもとも寿司職人で、大活躍されています(写真は左から森さん、フタツツの藤原ますみさん、深澤さん)。

そばは、信州産のそば粉を使用。少し細めのそばは大勢の方に人気で、深い味が堪能できます。寿司など一部ごはんものは事前の予約が必要ですが、メニューが豊富で夜の宴会も歓迎だそうです。私のおすすめメニューを紹介します。

冷たいそば // 天ざる、とろろそば、おろしそば、サラダそば(夏季限定)

温かいそば // かけそば、海老天そば(海老2尾)、たぬきそば、にしんそば(冬季限定)

ごはんもの(お米は地元の棚田米を使用) // 和風ソースカツ丼、天丼(いずれも1日5~6食限定、人数が多い場合は前日までに要予約)

夜の部の宴会メニュー(要予約) // お刺身(盛り込み)、にぎり寿司(盛り込み)、焼き鳥または焼きもの(盛り込み)、揚げ物(盛り込み)

盛り込みの内容は相談に応じます。天ぷらもおいしいですよ。旬のものがいつもでできます。寿司のネタは吟味され新鮮です。食事での森さんや深澤さんとの会話もさわやかで、味も一段とおいしく感じられるでしょう。そばのメニューは11月からすべて新そばになります。営業時間は11~14時、17~21時半(ラストオーダー21時)。月曜定休。電話026(276)1800 (御麓区・夏目嘉彦)

復興願った戦後の姿、芝原音頭に



一昨年の7月に婿養子として佐良志奈神社で結婚式を挙げ、去年の4月にこのさらけの里へ引越してきました。母屋のある芝原地区は、べんとり山と丸山の麓に位置し山と谷に囲まれた自然豊かな扇状地、のんびりした良い所とても気に入っています。

そんな芝原に、戦後の復興を願った素敵な唄があります。「芝原音頭」です。何を隠そう婿入りした中村家のお爺様の正三郎さんが昭和22(1947)年に作詞した唄なのです。毎年夏は盆踊りの定番の曲です。正三郎さんがどのような気持ち

ちで唄を作ったのか、正三郎さんが6年前の芝原区学習発表会に合わせてお書きになった「芝原音頭 由緒と回顧」から抜粋してお伝えします。



想えば終戦後間もない昭和二十二年今から六十年あまり前、日本中勝つと信じて

て堪え難きを堪え忍び難きを忍び、全力を尽くして参りましたが、敗戦という悲惨な現実に遭遇して指

ほんに芝原は良いところ

針を失い途方に暮れていた時期でした、とにかく沈滞気味の気分を晴らし、元気を出して戦後復興をやるうと意気込んでいました。

ある青年団の会合の折、提案されたのが芝原音頭をつくり、唄でもうたつて元気をだそうではないかといふことでした。早速芝原音頭の歌詞を募集することになったのが、事の始まりでした。私も素人で拙連ながら応募致しました処、審査の結果恥ずかしながら私の唄がよからうといふことで選ばれた次第です。

芝原音頭

作詞：中村 正三郎 補作：小口 喜久雄
作曲：小口 喜久雄 編曲：緑川 敦夫

- 一、 杏花咲きやあ 香りにむせぶ (むせぶ)
夢の芝原に乳牛鳴いて (ハイハイ)
紅いたすきの あの娘のほまに
笑えくぼが 笑えくぼが ぽつんと二つ
ほんに芝原は良いところ 明日も希望の唄が湧く
そうだ そだそだよいこらせ
- 二、 光る利鎌で 麦刈すませ (すませ)
仰ぐお空に 夕風涼し (ハイハイ)
千曲川風 黄金の波が
ゆうらりゆうらりとゆうらりゆうらりと よせては返す
ほんに芝原は良いところ 明日も希望の風が吹く
そうだ そだそだよいこらせ
- 三、 雪で化粧した 飯綱山の (やまの)
姿うつした 此の胸の内 (ハイハイ)
朝も早よから とんとんからり
私しや芝原の 私しや芝原の 機織りむすめ
ほんに芝原は良いところ 明日も希望の雲が湧く
そうだ そだそだよいこらせ
- 四、 唄え踊れや 芝原音頭
古いも若きも 手に手を取って (ハイハイ)
さあさ再建 やりやしよ やりしよ
そろう心で そろう心で それ一踊り
ほんに芝原は良いところ 明日も希望の鐘が鳴る
そうだ そだそだよいこらせ

詩の趣旨は芝原の風景と産業と情緒を織り込みました。当時の芝原の主な産業は米、麦、養蚕、乳牛でした。春の杏は当時各家に自然の大き木がありそれが一斉に咲き誇った様子は戦地で夢にまで見た桃源郷なる理想のふるさとの姿でした。初夏の麦刈りの頃一面に黄色く色づいた麦畑を渡ってくる風はなんとも清々しく生気を覚えさせるものでした。

当時芝原は非常に養蚕が盛んでみな桑畑でした春夏秋蚕と生産された繭は一等品は出荷し二、三等品

は家で糸を紡いで機を織り絹織物として販売したものです。その作業には古いも若きもお手伝い致しました。朝早くから夜遅くまで村中トントンからりと機織り音が響き渡りました。

あれから六十有余年青年団各種団体、公民館の皆様が親しく芝原音頭を唄い続けて居ります事を恥ずかしくも恐縮している次第です。

自分たちが今在るのは、戦後復興を願い明るく元気に乗り越えてきた先人のおかげ。唄に込められた気持ちや大事に唄って踊りながら、後世に語り継いでいきたいと思えます。(芝原区・中村真仁)

「よその子もうちの子も」親子登山

おらほの冠着

28



今から8年前の平成17年5月28日、「更級小学校おやじの会」の主催で「親子冠着山登山」を実施しました。「地域の子は地域で育てる」をテーマに更級のシンボル冠着山に親子で登って楽しもうと計画しました。参加者は小・中学生、幼児、保護者、先生、地域の方々など45名。更級小学校に集合し、車で坊城平に移動し、新緑の木々に囲まれた登山道をゆつくり登りました。

今は亡きさらしなの里の郷土史家、塚田哲男さんが子や孫と親子3代で参加して、冠着山の歴史や児抱岩などについて、詳しく説明

してくれました(上の写真、木の下で帽子姿が塚田さん)。同行した自然観察インストラクターから、ニリンソウ、ハナイカダ(山野草)、ウスバシロチョウ(蝶)、オオルリ(野鳥)、ハコネサンショウウオ(両生類)など多くの動植物の説明があり、親子で興味深く聞きました。休みながらゆつくり登りましたが、汗だくになって子どもをおんぶして登っていたお父さんの姿が、今でも目に浮かびます。

頂上でゆつくり遊んでから下山し、坊城平でお弁当を食べました。有志のお母さんが、前日から準備



おんぶして汗だく、お父さん

してくれた熱々のトン汁がふるまわれ、大人も子どもも「おいしい、おいしい」と何杯もおかわりして食べていました。

「親子冠着山登山」は平成17年以降、毎年実施していますが、平成19年には、信濃毎日新聞の特集「民が立つ」で1面に写真入りで取り上げられました。その年はコースを外れるハブニングもあり、児抱岩の上側の岩を登ったり、やぶの中を歩いたり、苦しい場面もありましたが無事に登頂できました。

夕方有志で行った慰労会場の仙石公民館では、大人たちが酒を酌み交わす横で、小学生が顔を突き

合わせて遊んだり、近所の中・高生もやって来たり、モツ煮を運んできた小学生が、大人の会話を割って入っていました。「よその子どもうちの子も、みんな育てるのがいい」と、大人と子どもが交じり合うにぎわいを見て確信しました。

今年(右上の写真、冠着山頂)は、周辺整備され看板も設置された「冠着十三仏」を通過するコースを登りました。冠着十三仏について、上水清さん(羽尾5区、更級人「風の会」事務局長)から説明していただき、十三仏のさらに上にある「浄土岩」の上では、さらしな

棚田バンドによる「冠着十三仏の歌」の演奏がありました。この神秘的なスポットでは心がいやされ、登山の喜びとともに、幸せな未来につながるエネルギーをもらいました。今後、冠着十三仏は、更級のパワースポットとして有名になるでしょう。4年前からは、頂上でお弁当を食べた後、上水さんの指導によりコマ回しやくぎ刺しなど、昔の遊びを楽しんでいます。

このように、お父さん、お母さん、先生、地域の皆さんなど、多くの人たちの関わりで、「親子冠着山登山」が継続されています。

「おやじの会」は決して義務感でなく、楽しみながら一人ひとりが地域のためにできることをやっています。その積み重ねとつながりを地域の中に築いていき、更級の素晴らしい歴史や文化が次世代に引き継がれていくことを願っています。

(仙石区・島谷守)

【編集後記】 記念すべき29号。いただいた文章も写真も思いがこもったものばかり。とてもカラフルな誌面になりました▽郷嶺山でのお月見、姨捨から眺める月とはまた違った趣があります。展望館からの昼間の眺望も雄大です。昼夜のメニューも充実していますので、ご利用ください▽編集会議ではほかに取り上げたい話題がいくつもありません。お声がかかりましたら、よろしくお願ひします。